



自分が小学校のころ、放課後の遊びといえば、近所の友達と草野球、缶蹴り、鬼ごっこ、虫捕り、たこ揚げ、秘密基地作りであった。何をするのに、1人ではなく、数人から十数人で、学年が違ふ友達が集まっていた。得意な遊びもあれば、不得意な遊びもあり、どの遊びにするか、相談して決めた。遊ぶ場所は空き地や稲刈り後の田んぼ、裏山で、大勢でわいわい、がやがやとが常であった。カブトムシやクワガタムシ捕りでは、先輩から秘密の場所に連れて行ってもらうたりした。時には、もめ事やけんかにもなったが、しばらく後にはまた仲良く遊んでいた。縦の人間関係にも、それなりの「寛容さ」がある時代であった。同学年の友達関係は学校の中にあつた。学校での遊び時間には制限があり、

再考・昔の遊び

人間関係自然に学ぶ



東北大学大学院
生命科学科教授

渡辺 正夫

縄跳び、ドッジボールなどで遊んだ。メンコ、スーパーカー消しゴム、あやとり、ルービックキューブも流行した。ルービックキューブは、得手不得手ではしたが、不得意な人にも教え合う環境

だろが、両者がしゃくし定規ではない「賢明さ」を持っていた気がする。学年を超えた縦のつながり、学年内の横のつながり、自分の振る舞いの三つの要素が心の織機で織られ、「タオル」のような複雑な人間関係を知らないうちに学習したのであろう。

さて、今の子供たちの遊びはどうなのであろうか。5月27日付のこのコラムでも記したが、ゲーム機の相互通信機能を使わず、個別に遊んでいるらしい。これでは、子供時代に人間関係を学ぶ機会を放棄しているとか言いようがない。環境的に昔の遊びをするこ

があった。これらも今だと学校に持つて行くのも禁止となりそうだが、遊ぶ子供たちも遊びに対して、この一線を越えてはいけないという心得が、指導する先生方も「こまでは」という懐の深さがあつた。それを許す時代だったの

とが難しくなっている時代だが、何とか復活させたいものである。では、昔の遊びは今の社会生活にどのように役立っているのだろうか。今の仕事現場では、自分一人ですべて完結する仕事はまれであり、関係各所

ふるさと伝言

との「共同作業」が必要となる。大学での研究で言えば「共同研究」であろう。こうした活動では、上下の人間関係や横の人間関係の迅速な理解が重要である。さらに、自分が得意とする仕事・研究ではないときこそ、部署や分野、領域を超えての「共同作業」「共同研究」が重要となる。すなわち、昔、子供時代に遊びを通して経験した人間関係の構築などが、大人になって仕事で活用できている訳である。

そんなときに思い出すのが、大学時代の師匠である日向康吉・東北大名誉教授の「餅は餅屋」という言葉。その道のプロの方にはかなわない、上手に協力し合うのが良いと常々おっしゃっていた。異分野のプロである研究室の方々と多くの共同研究ができたことで、自分の研究が大きく発展したことは言うまでもない。今の子供たちが大人になった時、スムーズな社会生活につながる、遊びを通じた多様な経験をたくさんしてもらいたいと思う。いま一度、昔の遊びを見直してはどうだろうか。(わたなべ・まさお、今治市生まれ)